

発行：〒656-0011 兵庫県洲本市炬口1-3-19 東亜天文学会速報部

郵便振替口座：00980-8-189107 加入者名：東亜天文学会速報部 購読料1部130円

Published by the Department of Yamamoto Circular, Oriental Astronomical Association

Collaborating with the Computing and Minor Planet Sections

P. O. Box No.32, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-8691 JAPAN

e-Mail address: (Subscription) URL: <http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/yc.htm>

編集：中野 主一 ☎ 0799-22-3747 Fax: 23-1104 e-Mail address:

Editor: Syuichi Nakano, 3-19, Takenokuchi 1 Chome, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-0011 JAPAN

2009年 二至二分 24 節気 (及び雑節)

OAA 計算課では、新年の二至二分 24 節気を次のとおり計算した。なお、力学時から日本時刻への変更は、力学時-世界時=+66秒を使用した。下の λ_0 は、太陽黄経である (cf. YC 2577)。

1月5日 00時30分：地球が近日点を通過する。
太陽の視直径 = 32' 31.9", 距離 = 1億4709万5550-km
7月4日 10時41分 地球が遠日点を通過する。
太陽の視直径 = 31' 27.8", 距離 = 1億5209万1130-km

2009/ JST	時 分 秒	λ_0	2009/ JST	時 分 秒	λ_0
1月5日 (月)	14 14 07: 小寒	285	7月2日 (木)	02 19 49: 半夏生	100
1月17日 (土)	08 57 15: 土用	297	7月7日 (火)	08 13 29: 小暑	105
1月20日 (火)	07 40 19: 大寒	300	7月19日 (日)	22 12 16: 土用	117
2月4日 (水)	01 49 47: 立春	315	7月23日 (木)	01 35 42: 大暑	120
2月18日 (水)	21 46 06: 雨水	330	8月7日 (金)	18 01 08: 立秋	135
3月5日 (木)	19 47 31: 啓蟄	345	8月23日 (日)	08 38 33: 処暑	150
3月20日 (金)	20 43 37: 春分	0	9月7日 (月)	20 57 35: 白露	165
4月5日 (日)	00 33 46: 清明	15	9月23日 (水)	06 18 34: 秋分	180
4月17日 (金)	06 04 21: 土用	27	10月8日 (木)	12 40 02: 寒露	195
4月20日 (月)	07 44 23: 穀雨	30	10月20日 (火)	15 22 05: 土用	207
5月5日 (火)	17 50 49: 立夏	45	10月23日 (金)	15 43 27: 霜降	210
5月21日 (木)	06 51 09: 小満	60	11月7日 (土)	15 56 14: 立冬	225
6月5日 (金)	21 59 03: 芒種	75	11月22日 (日)	13 22 33: 小雪	240
6月11日 (木)	03 28 16: 入梅	80	12月7日 (月)	08 52 13: 大雪	255
6月21日 (日)	14 45 30: 夏至	90	12月22日 (火)	02 46 47: 冬至	270

仮番号

ヒル新周期彗星 211P/ Hill (2008 X1)

ヒル (R. E. Hill) は、2008年12月4日にカテリナ・スカイサーベイの68-cm シュミットでオリオン座を撮影した捜索フレーム上の次の位置に 17 等級の新彗星を発見した。発見時、彗星には、10"ほどの恒星状の集光部がある拡散した 30"のコマと西北西に広がり拡散した 15"~20"の尾が見られた。5日に撮影された確認画像でも、彗星は、同様の形状を呈した。イタリーのリグストリ (R. Ligustri) が米国にある 25-cm 反射を遠隔操作して行なった12月5日の観測によると、彗星には、約 25"のコマが見られた。同じ望遠鏡を使用したギドーら (E. Guido et al.) による同日の観測では、彗星には、10"のコマと非常に淡い扇形の尾が北西に約 30"まで広がっていた。レモン山の 1.5-m 反射を使用したコワルスキ (R. A. Kowalski) の観測でも、彗星は、同じ様な形状を示した (IAUC 9001)。

2008 UT α (2000) δ Mag.
Dec. 4.34227 05^h 24^m 20^s.26 +03° 17' 52".2 17.4

ドイツのメイヤー (M. Meyer) は、パロマーで 2003年3月24日に撮影されたプレート上から 19 等級で写っていたこの彗星の1回帰前の観測を見つけた。天体は、明らかに彗星状で、8"のコマと西南西に 12"の尾が見られた。さらに、氏は、1夜の観測群の中に LONEOS サーベイで同年4月1日に発見されていた 19 等級の天体 (54103Y) が、この彗星であることを見つけた。

OAA 計算課では、2003年から 2008年までに行なわれた 118 個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0".56$ 。前回の近日点通過は 2002年8月19日であった。彗星の CCD 全光度は、上尾の門田健一氏 (K. Kadota) が 12月5日に 17.4 等、秦野の浅見敦夫氏 (A. Asami) が 6日に 17.6 等、芸西の関勉氏 (T. Seki) が 7日に 17.8 等、9日に 17.6 等 (写)、門田氏が 14日に 17.4 等、八束の安部裕史氏 (H. Abe) が 16日に 17.0 等。彗星は、周期が約 7 年ほどの新周期彗星であった。

T = 2009 May 7.77020 TT Epoch = 2009 May 9.0 TT
 ω = 4°.39327 } (2000.0) e = 0.3376046
 Ω = 117.29565 } a = 3.5661048 AU
i = 18.87264 } n° = 0.146356807
q = 2.3621714 AU P = 6.734 年

LINEAR 周期彗星 209P/ LINEAR (2004 CB = 2008 X2)

米国のハグ (*G. Hug, Scranton, KS*) は, 2009 年 4 月に回帰予定のこの彗星を 56-cm 反射を使用して, 2008 年 12 月 4 日に 19 等級で検出し, 翌 5 日にこれを確認した. 検出時の彗星は, 恒星状であった (IAUC 9002; cf. YC 2423). 彗星の検出位置は, 予報軌道 (NK 1096) から赤経方向に $-341''$, 赤緯方向に $+79''$ のずれがあり, これは, 近日点通過時刻への補正值にして $\Delta T = +0.156$ 日であった. なお, 秦野の浅見敦夫氏 (*A. Asami, Hadano*) から 12 月 6 日, 上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) から 8 日の観測が報告された. 彗星の CCD 全光度は, それぞれ, 19.2 等と 19.3 等であった.

OAA 計算課では, 2004 年から 2008 年 12 月 8 日に行なわれた門田氏の観測まで, 344 個の観測から次の連結軌道を計算した. 平均残差は $\pm 0''.42$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1696.htm>).

T = 2009 Apr. 15.97437 TT	Epoch = 2009 Mar. 30.0 TT
$\omega = 149^\circ.72948$	e = 0.6889778
$\Omega = 66.44967$	a = 2.9377529 AU
i = 19.14792	$n^\circ = 0.195740716$
q = 0.9137062 AU	P = 5.035 年

LINEAR 新彗星 C/2008 X3 (LINEAR)

LINEAR サーベイから 2008 年 12 月 4 日におとめ座の銀河群の中を撮影した検索フレーム上の次の位置に発見された 18 等級の小惑星状天体が報告された. レモン山の 1.5-m 反射を使用したコワルスキ (*R. A. Kowalski*) の 12 月 5 日の観測では, 彗星には, 約 $15''$ のコマと西北西に $30''$ の尾が見られた. また, 同日のハグ (*G. Hug, Scranton, KS*) による 56-cm 反射での観測でも, 天体には, 拡散したコマが西北に広がっていることが報告され, この天体は, 彗星であることが判明した (IAUC 9003). 彗星の CCD 全光度は, 秦野の浅見敦夫氏 (*A. Asami*) が 12 月 6 日に 17.9 等, 上尾の門田健一氏 (*K. Kadota*) が 17.3 等, 芸西の関勉氏 (*T. Seki*) が 7 日に 18.0 等, 9 日に 17.9 等 (写), 門田氏が 23 日に 17.4 等と観測している.

2008 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Dec. 4.44689	$12^h 20^m 41^s.89$	$+08^\circ 46' 23''.5$		18.4

OAA 計算課では, 2008 年 12 月 4 日から 12 月 25 日までに行なわれた 38 個の観測から次の軌道を決定した. 軌道改良に使用した最終観測は, シェロード氏 (*P. C. Sherrod, ASO*) によるもの. 彗星は, 周期が約 270 年の長周期彗星であった.

T = 2008 Oct. 10.5610 TT	$\omega = 140.7920$	} (2000.0)
e = 0.954510	$\Omega = 337.7412$	
q = 1.901626 AU	i = 66.4799	
a = 41.803 AU	P = 270.3 年	

超新星 SN 2008hz

山形市の板垣公一氏 (*Koichi Itagaki, Yamagata*) は, 2008 年 11 月 26 日夕刻, 21 時 JST に 60-cm f/5.7 反射望遠鏡+CCD 使用してアンドロメダ大星雲を撮影した検索フレーム上に, 同大星雲の中に出現した 18.2 等の新星を発見した. この星は, 同氏が 11 月 5 日に検索した時には, まだ出現していなかった. 板垣氏は, 11 月 28 日と 29 日にその出現を確認し, この星は, アンドロメダ大星雲に出現した新星 M31N 2008-11c として登録された. 板垣氏は, その出現位置を赤経 $\alpha = 00^h 43^m 18^s.62$, 赤緯 $\delta = +42^\circ 10' 14''.2$ と観測している.

発見後の 12 月 4 日に, パロマーの 5.1-m ヘルム望遠鏡でスペクトル観測を行った研究グループの解析によると, この星は, アンドロメダ大星雲の中に出現した新星ではなく, その背後にある銀河の中に出現した極大光度近くの超新星出現であることが判明した. 板垣氏によると, 搜索画像には, 小さな銀河があるようにも見られるとのこと. また, 九州大学の山岡氏 (*H. Yamaoka, Fukuoka*) の調査では, 銀河カタログにも, 大星雲の背後に小さな銀河が記載されているとのこと. なお, 板垣氏は, これで, 42 個目の超新星を発見したことになり, 氏が持つ我が国での超新星, 最多発見数をさらに更新した.

なお, 板垣氏は, 2008 年 11 月 26 日夕刻に M31 に 14 等級の明るい新星 (M31N 2008-11b; CBET 1588) を発見したが, この新星は, 銀河系内の変光星が増光したものであることがわかった (OAA 計算課新天体発見情報 No.133, CBET 1609, CBET 1611).

明るい彗星 Bright Comets:

この YC₅ で取り上げた彗星以外にも C/2006 OF₂, C/2006 W3, C/2008 A1, 22P, 29P 等の彗星が明るく見えている. これらは, 天文ガイド 2009 年 2 月号を参考のこと.